

くすり博物館だより

VOL. 66

2012年(平成24年)4月

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY



内藤記念くすり博物館
〒501-6195 岐阜県各務原市川島竹早町1
Tel: (0586) 89-2101 Fax: (0586) 89-2197
http://www.eisai.co.jp/museum/

平成24年度企画展「江戸のくすりハンター 小野蘭山 ～採薬を重視した本草学者がめざしたもの～」

開催期間 2012年4月25日(水)～2013年3月24日(日)

主催 内藤記念くすり博物館 内藤記念科学振興財団



企画展の会場

日本の本草学を集大成したといわれる本草学者・小野蘭山(1729-1810)に焦点をあて、彼の足跡とそれを受け継いだ門人たちの業績をご紹介します。

本草学とは主に薬用資源として利用できるものを研究する学問です。蘭山の生きた江戸時代中期～後期は、薬や健康維持への関心が庶民の間に広まっていった平和な時代でした。師を早くに亡くした蘭山は、独学で本草学を修めると私塾を構え、多くの門人を輩出しました。

蘭山の研究のすばらしさは、採薬で得られた膨大な実物調査にあるといえます。46年間にもおよぶ教育と研究活動は幕府の目にとり、71歳の時に江戸の医学館に医官として招へいされました。老いてもなお講義のかたわら門人を引き連れ、実物を求めて山野を探索

する姿は、まさに江戸時代のくすりハンターといえるでしょう。

明治時代になると医学は漢方から西洋医学へと移り変わり、やがて本草学は植物学、生物学へと変化していきました。今も牧野富太郎の植物図鑑や国語辞典の植物の記述には、蘭山とその門人たちの業績が脈々と受け継がれています。

私たちが普段あまり耳にすることのない本草学が近代の自然科学の礎となっていることを、小野蘭山の学績を通してご理解いただければ幸いです。

小野蘭山の生い立ち

蘭山は享保14年(1729)に京都で生まれました。本姓を佐伯、氏は小野、諱は職博、号は蘭山と称しました。幼い頃から読書好きで、13歳で松岡恕庵に入門して本草と神学を学びました。恕庵は蘭山が18歳の時に病気で亡くなり、実際の修業期間は5年足らずでしたが、師の遺志を継ぎ、その後は独学で本草学を修めました。

初期の業績は、師の『怡顔齋蘭品』の中で蘭山が描いた植物画として刊行されています。身体虚弱であった蘭山は、仕官の道をあきらめ、25歳の時に京都で私塾・衆芳軒を開きました。その後の京都での教育と研究は46年に及びました。師に最大の敬意を払っていた蘭山は、恕庵の師説を40歳過ぎまで崩さなかったといわれています。

記憶力が抜群で、質問にはいつどこで見たものか、名称から内容まで答えるなど、門人や知人からエピソードが伝えられています。読書と抄写を無上の楽しみとし、薬草調査に出向くとき以外は外出することはなかったといえます。文化7年(1810)に82歳で逝去しました。生涯、本草学の研鑽を積み、教育に力を注ぎました。名声を聞き、人物を慕って入門する者が後をたたなかったといわれています。



蘭山先生肖像

『重訂本草綱目啓蒙』文化6年(1809)刊より 谷文晁画

日本の本草学のあゆみ

古来より人類はさまざまな植物や動物、鉱物といった天然の産物を活用してきました。本草学とはこれらの有用な天然の産物を対象とし、その産地や形態、薬効などを研究する学問として紀元前の中国で発生しました。

漢の時代、紀元1～2世紀頃には最古の薬物書として、『神農本草経』が編纂されています。この薬物書は伝説上の皇帝・炎帝神農が記したといわれ、当時の薬学知識の集積として位置づけられました。唐の時代には『神農本草経』の注釈書を始めたといくつかの書物が日本に伝えられ、後の日本の本草学発祥のきっかけとなりました。

日本の本草学は、中国書物に記載された薬となる天然の産物について日本産の同一物の有無や、対応する和名の研究をその始まりとし、その先駆けとなったのが深江輔仁の『本草和名』です。16世紀末に李時珍の『本草綱目』が日本に伝わると、日本での本草学の研究も加速の度合いを増していきました。本草学が最も発展したのは江戸時代です。それまでの文献的考証から実物観察を重視し、日本の風土や植生に合致する実用的な学問へと発展を遂げる過程で、日本の植物図鑑や博物誌ともいえる書物が相次いで出版されるようになっていきました。

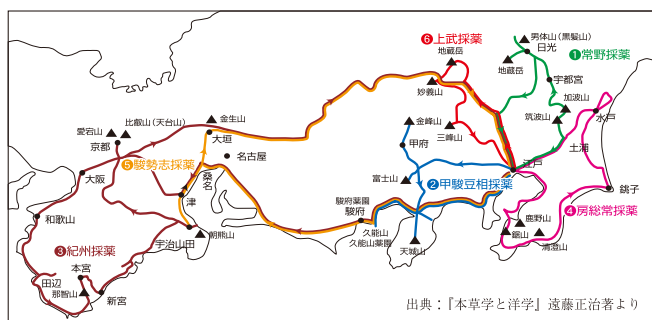
小野蘭山の本草学

寛政11年（1799）、71歳の蘭山は、幕府の命により江戸の医学館に医官として招へいされました。医学館では「実物をよく観察すること」の大切さを強調し、講義だけではなく、門人を率いては実地調査である野外採集（植物採取）にも積極的に赴きました。

蘭山の本草学には、採集によって得られた生きた知見がふんだんに加えられています。江戸での講義は『本草綱目啓蒙』48巻にまとめられ出版されました。この書物は平安時代から始まった日本の本草学の集大成と位置付けられ、わが国の本草書として高く評価されました。日本産の動物、植物、鉱物を網羅し、その和名、方言の収録は他の追随を許さないものでした。この書物はその後も多くの本草学者に活用され本草学は広く普及していき、幕末、明治以降の植物学・生物学などの近代学問へと継承されていきました。

本草学は膨大な知識と経験に、さらなる発見をつみ重ねて進展してきました。採集での生きた知識を重視した蘭山は、常に学問に対して厳しい姿勢で、教育には情熱をもって臨んだのでした。

諸国採集の経路図



蘭山は、享和元年（1801）から文化2年（1805）まで6回、関東を中心に14ヶ国を回り、その記録は採集記録として幕府に提出された。



『本草綱目』李時珍著 1603(万暦31)序

薬効ではなく、自然物の種類によって動植物を分類した本草書。中国・日本の本草学に大きな影響を与えた。



『怡顔齋蘭品』松岡恕庵著 小野蘭山画 明和9年(1772)師・松岡恕庵が蘭の品種についてまとめた本において、植物画の才能を発揮している。



『花彙』小野蘭山・島田充房共著 宝暦13年(1763)

精緻な植物画はとて美しく、優れた植物図鑑として高い評価を得て、フランス語に訳されパリでも出版された。



『本草綱目啓蒙』巻之1-48 小野蘭山口授

小野蕙畝(職孝)録 享和3年(1803)～文化2年(1805) 27冊 中国の李時珍著『本草綱目』について蘭山が講義した内容を、孫の小野職孝が筆記したもの。

本草学の普及

江戸時代中期になると、全国各地の薬種や産物を展示交換する薬品会、物産会などの展示会が催されるようになりました。世に知られていない薬物を出品した展覧会は本草学者たちの情報交換の場としての意味合いだけでなく、庶民にとっても娯楽的要素の高い見世物として人気を博しました。江戸時代の博覧会の始まりです。これらの展覧会は本草学の中の名物学、物産学といった新たな学問分野を生み出し、のちの博物学へと発展していきました。

物産会は平賀源内が発案したといわれており、本草学者・田村藍水(1718-76)が江戸で開催した薬品会が日本初の物産会とされています。以降、大坂、京都、尾張の各地で当時の本草学者や医師らにより薬品会が開催されるようになりました。江戸時代後期になると、「しやべんかい 緒鞭会」や「しやうひやくしや 嘗百社」といった研究グループが薬品会や本草会を主催するようになりました。

「緒鞭会」は富山藩主、旗本、薬種商を中心とした研究会でした。「嘗百社」は尾張藩主と蘭山の門人の水谷豊文、伊藤圭介を中心とした研究会で、知識人や文化人ばかりでなく、一般庶民にも動物、植物、鉱物が公開されました。こうした物産会は文芸、園芸といったさまざまな分野で人々に浸透していきました。



センザンコウ(穿山甲)の剥製

有鱗類の哺乳動物で、鱗状の皮膚を催乳剤に用いる。尾張医学会にもこのような剥製が多数展示された。



(写真左より) 鶴毛(鶴の羽)、魚尾竹(フジウツギ)、象豆莢(モダマ) 尾張薬品会に出展されたと思われる生薬類。

学統を継いだ門人

蘭山の門人は1000人にも及んだといわれています。京都で名声を博した蘭山のもとには、遠方より入門する者や書簡を通して情報交換と指導を受ける者もいました。『本草綱目啓蒙』を始めとする一連の著書は、蘭山と門人らの組織的な研究によって成し遂げられたのです。

京都に衆芳軒を開いた頃の蘭山は、厳しい塾則を設けていました。当時の代表的門人としては木村兼葭堂が知られています。40歳を過ぎた頃から蘭山の指導教育理念にも変化が現れ、門人に自らの教えを広める裁量を与えるようになりました。山本亡羊は山本読書室を核とした教育に尽力し、蘭山を祖とすると3代目の門人を輩出するようになりました。

標本の分類をシーボルトに賞賛された門人の水谷豊文や、海外での日本の植物書『日本植物誌(フロラ・ヤポニカ)』をもとに『泰西本草名疏』を著した伊藤圭介、さらには江戸時代最大の植物図鑑『本草図譜』を著した岩崎灌園、リンネの分類法でまとめられた植物図譜『草木図説』を著した飯沼慾斎、当時としては最先端の西洋植物学の解剖図や用語などを『植学啓原』で紹介した宇田川榕菴など後に続く者たちが西洋植物学の考え方を本草学に取り入れていきました。明治から昭和に活躍した近代日本を代表する植物学者である牧野富太郎へと、その流れは途切れることなく継承されていきました。私たちが普段あまり耳にすることのない本草学が近代の自然科学の礎となっているのです。



蘭画 木村兼葭堂画 江戸中期



(写真左)『草木図説』飯沼慾斎著 安政3年(1856) ウコンを記載したページ。右の写真と比較すると、その写実性がよくわかる。
(写真右) ウコンの花



『本草図譜』96巻 岩崎灌園著 天保元年-弘化元年(1830-1844)成立 大正5年-11年(1916-1922)に刊行されたもの。



『植学啓原』宇田川榕菴著 天保5年(1834)

よろしくお願ひいたします

内藤記念くすり博物館館長 赤田 幸雄



1971年6月の開館以来、くすり博物館来館者数は2002年12月6日に100万人を超え、2011年には開館40周年を迎えました。

近年、エーザイのグローバル化に伴い日本国内に限らずアジア、欧米諸国からの来館者も

多くなっています。長くエーザイのアジアでの事業発展に携わって来た者としてはくすり博物館の「くすりの歴史と文化」伝承と啓発活動を通じた薬学・薬業発展への貢献もグローバル化する必要性を感じます。

くすり博物館は引き続き日本の来館者の皆様への満足度向上を充実したいと思います。加えて、今後は外国からの来館者の皆様に日本における「くすりの歴史と文化」の価値伝承をはかり、さらには海外との博物館交流も積極的に実施したいと考えます。

「くすり博物館」はその使命達成はもとより来館者楽しく親しみやすい「くすりの歴史と文化」に触れられる場所作りに博物館職員一同、不断の努力を重ね、全力を尽くしてまいります。

■企画展図録のご案内

『江戸のくすりハンター 小野蘭山』

—採薬を重視した本草学者がめざしたもの—



A4判48ページ 1,000円で販売いたします。

■近代化産業遺産記念展示 第2シリーズを開始しました

内藤記念くすり博物館の資料のうち、幕末から昭和初期にかけての医薬に関するものが、産業近代化の過程で大きな意義を持つとして経済産業省により近代化産業遺産に認定されました。これを記念して2009-2010年に12回にわたって認定された資料を毎月紹介する展示を行っていましたが、ご好評につき、新たに資料を展示します。ぜひご覧ください。



(左)吸入器
展示予定の資料のひとつで、昭和12年のもの。

■「くすりと医療の歴史講座」

2011年9月より、永縄厚雄前館長による講演会「病を癒す～人とくすりの歴史～」を皮切りに、常設展や企画展のガイドツアー、公開講座などを10回にわたって実施し、ご好評いただきました。

11月26日には、順天堂大学名誉教授で、日本医史学会理事長の酒井シズ先生をお迎えして、市民講演会「テレビドラマー仁JINーと江戸の医療」を開催し、146名の方にご参加いただきました。



■各務原市のイベントに参加しました

今年度は9月に河跡湖フェスティバル、2月にはかかみがはらパフォーマンスフェアに参加しました。同フェアでは、植物画の展示と植物画講座の紹介を行い、講師の逸見誠三郎による植物画の指導もあり、初心者の方が、鉛筆で植物画を描く体験を楽しまれました。



(上)かかみがはらパフォーマンスフェアで植物画体験をされている皆さん
(右)参加者の方が当日初めて描かれた植物画



◆◆資料・図書ご提供者ご芳名◆◆

太田由佳 坂井建雄 篠原秀幸
柴田保彦 菅原真樹 鈴木則子
(公益財団法人)武田科学振興財団
豊嶋利雄 中北薬品(株) 長野仁
中村節子 林貞 星薬科大学
松木明知 (株)メニコン 森博美

～ありがとうございました～
(敬称略/五十音順)

内藤記念くすり博物館

開館 9:00-16:30
休館 月曜日・年末年始
館長 赤田幸雄
学芸員 稲垣裕美(編集担当)
学芸員・司書 野尻佳与子 伊藤恭子
庶務 森田麻起子
沼田望(見学受付)
田中康恵(見学受付)
薬用植物園 伊澤大 荻谷辰行
(栽培管理) 亀谷芳明 日和佐真

【お知らせ】『くすり博物館だより』は年1回の発行とさせていただきます。バックナンバーはウェブサイトからダウンロードできます。(45号以降)